

# 教員・保育者養成課程におけるミュージカル・オペレッタ・音楽劇実践の教育的効果に関する研究動向

高橋 摩衣子

**要旨：**教員・保育者養成課程において行われているミュージカル・オペレッタ・音楽劇の実践に関する先行研究を集め研究動向の調査を行った。養成課程では、表現の学習の集大成として、また保育五領域全てに関わる総合表現活動としてこのような活動が捉えられている。その実践の規模や方法は様々であったが、美術的要素やダンスを簡略化することはあっても音楽要素と演劇要素は必ず含まれるという点、必ず発表を行うという点が共通点として挙げられた。実践を通じた学生の成長では、人間関係の調整能力、表現の技術、自己肯定感の向上が報告されている。一方で、課題としては、音楽科教員による指導に偏っており科目間連携ができていない事例や、マネジメントがうまく指導できていない事例が挙がっていた。さらに、ミュージカル制作に取り組む学生にアンケートをとったところ、学生も人間関係の調整能力の成長を期待していることが明らかとなった。また、授業で学んできたことを活かすというよりは、自らの特技を活かして活躍したいと考える傾向が見られた。身体表現、美術表現、スケジュール管理などのマネジメントといった音楽表現以外の要素をどのように指導していくか、また、音楽表現以外の特技を活かそうと参加する学生の能力をどのようにすくい上げ評価していくかが、養成課程におけるミュージカル・オペレッタ・音楽劇の実践の課題である。

**キーワード：**総合表現・音楽表現・舞台・科目間連携

## 第1章 研究の背景

### 第1節 研究目的と方法

教員・保育者養成課程において、学生による音楽的要素を持つ演劇の実践が広く行われている。このような活動は「ミュージカル」「オペレッタ」「音楽劇」などと呼ばれ、学生が音楽表現のみならず、総合的な表現を学習する場として捉えられている。本学においても、30年以上にわたって有志の学生によるミュージカル公演が毎年行われており、学生の成長の場として、また、地域貢献や学科の広報の場として学科をあげて支援している。

本研究では、先行研究を調査することで、ミュージカル・オペレッタ・音楽劇の教育的効果に関する研究動向を整理する。それを通じて、学生によるミュージカル・オペレッタ・音楽劇の実践がどのように行われているのか、また、そこではどのような教育的効果が認められているのかを明らか

にする。そして、指導や実践の分析にどのような課題があるかを考察する。また、本学のミュージカル制作に参加している学生にアンケートをとることで、学生は学びをどのようにとらえているのかを把握し、先行研究で明らかになった実践の様子との比較を行う。

### 第2節 先行研究

本研究の先行研究に、山本(2009)がある。山本はそれまでの先行研究を俯瞰的に調査し、教員養成校における音楽劇・オペレッタ実践の実態、ねらい、意義や効果を整理している。一方で、養成校での実践を「教育現場での意義と混同し考えられ、その共通点、異なる点が明らかにされていない」(山本 2009)と指摘している。しかしながら、山本による研究より10年を経た現在は、研究の蓄積もあり、養成課程での実践をより明確に捉えることができると考えられる。

## 第2章 文献調査

### 第1節 調査対象

CiNiiによる検索で抽出される論文を調査対象とする。

まず、学生による実践について調査するため、「学生」と、「ミュージカル」「オペレッタ」「音楽劇」の3語の組み合わせで検索を行ったところ、検索数は表1のようになった。重複して検索された論文もあり、抽出された論文の総数は89本であった。

表1 CiNii 論文検索結果 「学生」×「ミュージカル」「オペレッタ」「音楽劇」

	ミュージカル	オペレッタ	音楽劇
学生	37本	45本	11本

2019年8月19日に検索。検索総数89本

89本中、「ミュージカル」を演劇的作品の意味ではなく使用<sup>1)</sup>している論文が3本、大学生ではなく生徒や児童・またはプロによる実践に関するものが9本であったため、大学生による実践を分析したものは77本であった。77本のうち、英語・英文学を専攻する学生の英語力向上をねらいとしたものが1本、デザイン系学科でのデザイン教育の一環として実践されたものが1本、看護専門学校の「音楽」の授業での取り組みが1本であり、残る74本が教員・保育者養成課程での実践についての研究であった。芸術大学や音楽大学などのオペラ歌手やミュージカル俳優を輩出している大学における実践も抽出されるものと想定していたが、今回の論文検索では現れてこなかった。

さらに対象を教員・保育者養成課程に絞るため、「教員養成」「保育者養成」「保育士養成」と「ミュージカル」「オペレッタ」「音楽劇」の組み合わせで再度論文検索を行った。検索結果は、表2の通りであり、重複して検索された論文もあり、抽出された論文の総数は52本であった。

表2 CiNii 論文検索結果 「教員養成」「保育者養成」「保育士養成」×「ミュージカル」「オペレッタ」「音楽劇」

	ミュージカル	オペレッタ	音楽劇
教員養成	8本 <sup>2)</sup>	5本	5本
保育者養成	11本 <sup>3)</sup>	22本	4本
保育士養成	1本	3本	0本

2019年8月19日に検索。検索総数52本

一般的に、「ミュージカル」はポピュラー音楽を用いるもの、「オペレッタ」はクラシック音楽を用いる「オペラ」の小規模なものを指し、別のジャンルとして捉えられている。しかしながら、上記の検索で抽出された論文を読む限りでは、養成課程においては「ミュージカル」「オペレッタ」「音楽劇」は同じような意味で用いられている。そして、保育者養成では「オペレッタ」の語を使用する傾向が見られた。

表1、表2で抽出された合計124本の論文の中で、教員・保育者養成課程での実践に関連のない論文を除いた、99本の論文を調査対象とした。山本(2009)の調査では30校での実践が挙がっていたが、今回は60の養成校での実践が明らかになった。10年間で研究の蓄積がなされたことが伺える。また、これらの論文は、学生による実践の過程や成長を分析したものと、脚本や楽曲の制作過程と完成形を紹介したものとに大別される。

### 第2節 実践の実態

まず、「保育者養成」と「教員養成」とでは、「保育者養成」に関わる論文の方が検索件数が多かった(表1)。保育者養成課程と教員養成課程を兼ねている学科も数に含まれてはいるが、概して、教員養成課程より保育者養成課程の方が実践例が多い。その理由として、ミュージカル活動が保育における五領域「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」のすべてに関わるものであり、保育に取り入れるのにふさわしいと捉えられていることが挙げられる。

1) 「ミュージカル・ノイズ」や「フォルマシオン・ミュージカル」が含まれる。

2) 「フォルマシオン・ミュージカル」を1件含む。

3) 「フォルマシオン・ミュージカル」を3件含む。

また、実践の規模や方法は様々であり、山本(2009)の「どのような形態で行われているかというの、発表形態(授業内のみ、学校内、学校外公演)、創作か既成かその折衷か、人数の規模、公演頻度、など様々である」という指摘の通りであった。

以下、先行研究に記されていた実践の形態である。

- ①準備時間・・・授業やゼミでの活動、すなわちカリキュラムの一部として位置付けられている活動であることが多いが、一部に有志による課外活動として行われているケースもあった。
- ②科目名称・・・カリキュラムの一部として実践が行われている場合、どのような名称の科目で実践されているのかを調査し、科目名に含まれる言葉についてそれぞれ何回出現しているか数えたところ、音楽に関わる言葉が合計25回出現していた<sup>4)</sup>。一方で、他の表現領域に関わる言葉は4回しか出現していなかった<sup>5)</sup>。「表現」、「総合」といった言葉が使われている場合<sup>6)</sup>も、内実は音楽科教員による授業であることも多かった。このように、音楽に関わる授業での実践が圧倒的に多い。また、12校がゼミでの実践を行っていた。
- ③指導方法・・・音楽を専門とする教員が指導するケースが多い。一部で、専門の異なる複数の教員による指導がなされるケースや、音楽科教員による指導ではあるが他の教員(特に身体表現)のサポートを受けるケースもある。
- ④準備期間・・・複数年度にまたがるケース、通年授業で行われるケース、半期の授業で完成させるケースがあった。また、半期の授業のうち4～5回程度の授業で行われることもあった。このように準備期間は様々であり、それとともに完成する作品の規模も様々である。
- ⑤発表・・・授業内での発表、学内で関係者に向けての発表、学園祭や地域貢献活動などの学内

イベントの機会に観客を招待して行う発表、外部のホールや園などでの発表など、様々な形態があった。

- ⑥脚本・・・既存の脚本を使うこともあれば、既存の脚本をアレンジしたり既存の物語を脚本化するケースなど、オリジナリティの点で様々なレベルの脚本が存在した。また、既存の楽曲をもとにストーリーを膨らませて脚本とするケースもあった。
- ⑦ストーリー・・・一部、学生による表現にふさわしいものもあったが、多くは子ども向けの内容であった。理由としては、発表の場に子どもを観客として招待していること、あるいは学生が教員・保育者となった際の参考となるように設定していることが考えられる。
- ⑧楽曲・・・オリジナルの楽曲を創作するケース、既存の音楽をそのまま使うケース、既存のメロディーに新たな歌詞を当てはめて替え歌を作るケースがあった。
- ⑨演奏・・・歌の伴奏は、ピアノ伴奏、器楽合奏など様々な形態があった。CDなど既存の音源を活用するケースもあった。
- ⑩役割分担・・・造形制作などが必要のない小規模の公演の場合には、学生全員が出演者となる。規模が大きくなると、学生全員が出演する前提で出演者が制作も行うケースと、出演者と裏方で役割分担するケースとに分かれた。  
このように実践の規模や方法は様々だったが、そこには共通点が見られた。それは、音楽要素と演劇要素を含むこと、つまり、美術的要素やダンスは簡略化することはあっても、音楽と台詞は必ずあるという点である。さらに、どんなに規模の小さい活動であっても、例えば授業内で学生相互に発表するなど必ず発表の機会を設け、観客への発表までを一連の学習と捉えている点も共通点として挙げられる。

4)「音楽」19回、「声楽」3回、「合唱」1回、「ピアノ」1回、「歌唱」1回。

5)「言語」2回、「ダンス」1回、「造形」1回。

6)「表現」20回、「総合」12回。

### 第3節 学生の学び

#### 第1項 学生の学び — 人間関係

ミュージカル・オペレッタ・音楽劇の実践を通じた学生の成長として、人間関係を構築し問題解決をしていく能力の向上が認められている。多くの文献で、学生が葛藤の中成長する姿が描写されている。様々な役割を分担してグループで協力しあう舞台制作ならではの成長といえよう。このような人間関係の調整能力に着目してミュージカル活動の有効性を述べる論文が数多く見られた。一方で、多川(2008)と永淵(2016)はともに、仲良しグループの中で活動をしているだけでは成長ができないことを指摘しており、学生の成長を目的としてミュージカル活動を行うならば、指導者が学生同士の関係にも注意して活動を設定する必要がある。

#### 第2項 学生の学び — 表現の技術

ミュージカル・オペレッタ・音楽劇の活動は総合的な表現活動であり、養成課程での表現の学習の集大成とも捉えられており、最高学年での実践例が多く見られた。そして、実際に学生たちが練習を重ねる姿や、表現を工夫し色々な方法を試みている姿が様々な文献に現れ、学生が表現の技術を向上させる機会となっていることが伺える。しかし、学生がどのような表現能力を高めたかを詳細に分析した研究は数少ない。この点に関しては、歌唱や演奏、または美術制作といった知識や技術に関しては既に他の科目で学習済みであり、一から学習するものではないことが前提となっている点が要因としてあるかもしれない。また、個々の学生が行う練習や作業が異なっており個人によって伸長される能力が異なっているため一般化して論じることができないという点も、学生の技術・能力の向上を分析することができない一因であろう。

しかしながらミュージカル・オペレッタ・音楽劇でこそ伸ばせる力もある。例えば、三木(2006)は「歌唱、舞踊、演技と、習得すべき内容が多岐にわたる。それらをバランス良く進化させる為には、多くの練習量と強い意志力が求められる」と、

複数の技術の組み合わせに言及している。また、内田(2018)が考察している台詞にも歌にも活かすことのできる発声法や、基村(2018)が学生に体験させている台詞と歌唱での感情表現の違いは、演技と歌が一体となったミュージカル・オペレッタ・音楽劇ならではの学びである。複合的な表現について学生をどのように指導し何を体得させるかについてはこれからの研究の余地があると考えられる。学生の表現力の成長を見たとき、それまでの学習をさらに発展させたものなのかそれとも複合表現だからこそ培われたものなのか、という視点で分析すると、よりミュージカル・オペレッタ・音楽劇の教育的意義が明確になるだろう。

また、指導者が音楽を専門とする教員が担当することが多いため、どうしても分析が音楽的側面に偏っているという問題点がある。魚住ら(2007)は音楽、造形、衣装、舞台装置、台本、台詞、動き・踊りといった多岐にわたる表現活動について調査しており、身体表現の成長を捉えた研究は北村・松川(2015)、岡部ら(2017)などがあつた。しかしながら美術面での研究はさらに少なく、鳥越(2002)による案内状のデザインについての研究は稀有な例であつた。しかしながらこのような制作物も公演には重要であり、今後は特に美術分野での研究が望まれる。

#### 第3項 学生の学び — 自己肯定感

達成感や表現する喜びといった肯定的な感情を抱くことによって自己肯定感を高める記述も頻出していた。このように本番の体験を通じて学生は自己肯定感を獲得していくため、ミュージカル・オペレッタ・音楽劇の学習には発表する場が必ず設けられている。一方で、自己肯定感は発表の成功だけでなく、人間関係調整能力や表現能力などの向上によってももたらされると推測されるが、これらの成長と自己肯定感がどのように関連していくかについての分析が今後さらに必要である。

また、増原・岡村(2006)が「様々な経歴を持つ学生の特長、経験、特徴」を活かすことができると指摘し、津山ら(2017)が「自分の得意分野を活かしながら総合的に学習できることを肯定する意見が数多く見られた」と述べているように、ミュー

ミュージカル・オペレッタ・音楽劇は、学生それぞれの特技を活かすことのできる場と認識されている。授業ではなかなか評価されない特技を発揮することができるなら、学生の自己肯定感の向上につながるであろう。しかしながら、音楽だけ集中して取り上げる指導では、音楽以外の特技を持つ学生の活躍や評価される機会が制限されてしまう。阪木(2016)が、演者と裏方では体験に違いが生じ、特に受け身的に裏方に参加した学生には達成感が感じられにくいという点を指摘しているが、指導という観点だけでなく、学生の特技を活かし評価するという観点でも指導者には音楽に限らない表現技術全般への理解が求められる。

#### 第4項 学生の学び—ミュージカルを指導する力

ミュージカル活動を、科目名に「指導法」とついている授業で取り上げている学校も5校あった。では、どのように学生が指導法を身につけているかに関する具体的な分析はあまりなされていない。確かに、紙屋(2003)が「指導法を習得する最も良い方法は、保育者自身が実際にミュージカルを経験することである」と述べている通り、経験することは指導法を獲得することにつながるだろう。一方で、卒業生を対象にしたアンケートでオペレッタ実践が役に立ったと考える保育者の声も挙がっており(武岡 2010)、指導力に対しての効果は認められる。学生が実践を通して指導法をどのように学んでいるのか、表現力や人間関係調整能力を高めたことがどのように指導力の向上に繋がっていくのか、さらなる考察が求められている。

#### 第4節 課題

様々な課題も浮き上がってきた。記述が多かったものは、科目間連携である。音楽科教員による指導をとっている学校が多く、「ミュージカル・オペレッタ・音楽劇は総合芸術である」「保育五領域全てに関わる活動である」とうたってはいるものの、音楽中心の指導になってしまっている実践が多い実態も明らかとなった。音楽科教員単独での授業の場合は、指導が音楽に偏ってしまうた

め、大道具・小道具・衣装など造形制作を授業時間外にやることになってしまったり、造形制作及び演技やダンスなどの身体表現の指導が十分にできなかったりといった、音楽以外の要素に対する指導が課題として挙がっている。それに関しては、聖母女学院短期大学(福井ら 2009)、湊川短期大学(大西ら 2019)、川崎医療短期大学(伊藤ら 2014)、東京女子体育短期大学(三好ら 2018)での実践のように、様々な専門分野の教員が協力し合って指導する体制を整えることで成果をあげている例が参考になる。しかしながら小規模な実践を行なっているケースでは、科目間連携をとりながら音楽・美術・身体表現をバランス良く指導することは困難であろう。

また、計画性などマネージメントに関わる問題も挙がっていた。予定通りに進まず制作が遅れる、見通しを立てて準備を進められない、作業の負担が特定の学生に偏ってしまう、といった問題が生じていた。また、豊田(2008)は、「コミュニケーションが苦手であったり、精神的なサポートが必要な学生への、より丁寧な指導」が課題となっていることを指摘している。すなわち、学生への指導内容は表現技術にとどまらず、多岐にわたる指導や配慮が指導者に求められている。

### 第3章 本学学生を対象としたアンケート調査

#### 第1節 調査方法

先行研究で考察されている以上のような学びについて学生はどのように考え、期待しているのか、これからミュージカル制作に参加しようとしている本学4年生にアンケート調査を行った。本学のミュージカルは、4年生が卒業記念に行うもので、カリキュラムには位置づけられていない有志による活動である。毎年70~80人程のメンバーが集まり、実行委員を中心に出演者や裏方を役割分担し、およそ1年の制作期間を経て年度末に2,000人程の集客の公演を行う。

今年度のミュージカルの制作がまだ本格的には始まっておらず、参加希望者がSNSで情報交換をしている状態であった2019年7月29日にアン

ケートの回答を募ったところ、8月2日までの間にSNSグループ参加者67名(当時)のうち33名から回答を得た。

## 第2節 調査結果

まず、「卒業記念ミュージカルへの参加を通じて、一番成長できると思うものは何ですか。一つだけ選んでください。」の問いには、「人間関係の調整能力。協力し合う力。」「自分の担当の役割に関わる技術や知識。(演技力、演奏能力、造形技術など)」「子どもにミュージカルを指導する力。」「その他」の回答を用意した。33人のうち25人が「人間関係の調整能力。協力し合う力。」を選び、7人が「自分の担当の役割に関わる技術や知識。(演技力、演奏能力、造形技術など)」を選んだ。先行研究の調査では学生の人間関係における成長に着目した分析が多くみられていたが、学生の希望でも「人間関係における成長」が期待されていることが現れていた。学生も、ミュージカルの制作を通じた成長に対して同様のイメージを抱いている。「子どもにミュージカルを指導する力。」を選ぶ学生もいることを想定していたが、0人だった。指導力は自分が経験することを通して間接的に高められるものなので、イメージとしてはあまり浮かばないのかもしれない。

次に、「あなたが卒業記念ミュージカルに参加した場合、以下のうちのどの能力が役に立つと思いますか。全て選んでください。」の問いには、「大学の授業や実習で学んだ知識や能力」「授業以外の大学での活動(部活やサークル、子育て支援活動など)で培った知識や能力」「大学以外の場(趣味、習い事、中高の部活など)で培った知識や能力」「役に立つ能力はない」の回答を用意した。学生は積極的にたくさんの項目を回答しており、3つの能力全てを選んだ学生は33人中8人だった。2項目を選んだ学生が13人、1つだけ選んだ学生が12人だった。また、同じ質問に対して最もあてはまる項目を単一回答で問い直したところ、「授業以外の大学での活動(部活やサークル、子育て支援活動など)で培った知識や能力」を選んだ学生が一番多く18人、「大学以外の場(趣味、習い事、中高の部活など)で培った知識や能力」

を選んだ学生が10人、「大学の授業や実習で学んだ知識や能力」を選んだ学生が5人という結果になった。

## 第3節 考察

学生も、人間関係の調整能力を高めたいと考えていることが明らかになった。また、「授業以外の大学での活動で培った知識や能力」が最も役に立つと考えている学生が多かった。

舞台制作は様々な役割を分担して行うため、学生は「特技」を活かしたポジションで参加しようとする。授業で学び、皆がおそろいで身につけている技術は「特技」とはならず、授業外で身につけた技術こそが「特技」ととらえられているのではないだろうか。本学は、音楽やダンスのサークルや、イベントの企画に長けたボランティアのサークルが存在している。音楽班による吹奏楽の演奏、パフォーマンス班による現代的なダンスは授業ではなくサークル活動で身につけたものである。また、学生の中には、観劇が好きなものや手芸を趣味にするものもいる。そういった学生がミュージカル制作において大いに知識や技術を発揮している。先行研究では、ミュージカル・オペレッタ・音楽劇での表現活動を学校でのそれまでの学びの集大成ととらえる見方と、それぞれの学生の特技を活かす場ととらえる見方とがあったが、役に立つ能力として「授業以外の大学での活動で培った知識や能力」を挙げた学生は、後者の「特技を活かす場」として活動をとらえているということであろう。そして、自分の特技を活かして集団の中で活躍できた際には、それが喜びとなり自己肯定感の向上につながっていく。

そうであれば、舞台制作において、いかに学生を指導し能力を高めるかという視点だけではなく、学生が日常的に身につけている能力をいかにすくい上げて活かしていくか、という視点も大変重要になってくる。

## 第4章 まとめ

ミュージカル・オペレッタ・音楽劇の実践には、表現技術の向上に加え、人間関係における成長と

自己肯定感の向上が認められており、学生もそれを期待して制作に参加している。

準備の課程で表現技術や人間関係調整能力において成長することも重要であるが、発表の機会に達成感や表現する喜びを感じることで自己肯定感を高めることも成長には重要である。だからこそ、発表の機会が必須になっている。また、そこで自分の特技を発揮できることも自己肯定感を高める。

今回先行研究を調査したところ、想像以上に音楽系教員による研究に偏っていた。ミュージカル・オペレッタ・音楽劇は総合芸術であり身体表現や美術表現も密接に関わっているため、様々な分野の専門家による指導を受けることが好ましく、そのように指導体制を整えている学校もあった。しかし、音楽科教員が全てを指導しなければいけないケースも多い。また、計画的に作業を進められないという反省も度々見られた。音楽表現のみならず、身体表現や美術表現、スケジュール管理などのマネージメントをどのように指導していくか、また、音楽表現以外の特技を活かそうと参加する学生の能力をどのようにすくい上げ評価していくかが、養成課程におけるミュージカル・オペレッタ・音楽劇の実践の課題といえよう。

さらに、様々な表現をいかに組み合わせ複合的な表現を完成させるかという点で学生の能力を伸ばすことができれば、まさに総合芸術であるミュージカル・オペレッタ・音楽劇の特性を活かした学びとなる。そのためには、複数の表現を組み合わせる技術の学習をどのように計画し、指導し、評価するかについてのさらなる研究が必要とされている。

## 主要参考文献

伊藤 智里, 秋政 邦江, 青井 則子, 尾崎 公彦, 入江 慶太(2014)「総合表現(オペレッタ)における授業開発Ⅱ: 領域『言葉』『表現(身体表現・造形表現・音楽)』に関する科目内容とオペレッタ制作との関連」『川崎医療短期大学紀要』第34巻, 川崎医療短期大学, pp.29-37  
魚住 美智子, 林 和美, 田中 千恵(2007)「オペレッ

タ創作活動による表現力の育成と保育への応用Ⅲ: 学生のアンケートを通して」『大阪城南女子短期大学研究紀要』第41巻, 大阪城南女子短期大学, pp.27-55

内田 恵美子, 大川 晶也(2018)「保育者・教員養成課程における発声指導の必要性: 発声テキストの研究と作成」『東海学院大学短期大学部紀要』44号, 東海学院大学短期大学部, pp.37-46

大西 隆弘, 白井 奈緒, 佐伯 岳春(2019)「領域『表現』における相乗作用をもたらす表現教育の可能性: ミュージカル『ライオンキング』を題材に」『湊川短期大学紀要』第55巻, 湊川短期大学, pp.79-85

岡部 裕美, 富田 久枝, 七澤 朱音(2017)「科目横断によるミュージカル指導と公演の教育的効果: 音楽と身体表現性を引き出す授業の取り組み」『千葉大学教育学部研究紀要』第66巻第1号, 千葉大学教育学部, pp.191-198

紙屋 信義(2003)「保育者養成における子どもミュージカル発表の実際 — 附属幼稚園での『こぶとりじいさん』の実践を通して」『千葉大学教育学部研究紀要』51巻, 千葉大学教育学部, pp.307-311

北村 直也, 松川 利広(2015)「子どもの表現の基に何があるか: オペレッタにおける『型』としての『腰』の構造と働き」『次世代教員養成センター研究紀要』1号, 奈良教育大学次世代教員養成センター, pp.245-255

阪木 啓二(2016)「保育を学ぶ学生がオペレッタを制作する中で体験する教育的効果」『精華女子短期大学研究紀要』42号, 精華女子短期大学, pp.15-20

多川 則子(2008)「集団活動に取り組む中での学生の変化 — オペレッタ公演の準備活動を通して」『研究紀要』第29号, 愛知文教女子短期大学, pp.71-79

武岡 真知子(2010)「保育者養成における音楽表現“オペレッタ”の意義」『富山短期大学紀要』第45巻, 富山短期大学, pp.33-42

津山 美紀, 矢野 洋子, 富永 剛, 田中 敏明(2017)「保育を学ぶ学生の表現力と人間関係力の向

- 上を目指した音楽劇：関係5分野の連携による共同制作」『九州女子大学紀要』第53巻第2号，九州女子大学，pp.75-84
- 豊田 典子(2008)「KAORI 共育プロジェクトにおける授業プロジェクト『オペレッタ』の取組実践からの考察」『大阪薫英女子短期大学児童教育学科研究誌』第14号，大阪薫英女子短期大学，pp.35-42
- 鳥越 亜矢(2002)「幼児理解に基づいた保育者養成の造形表現学習を考える：子どもにとって分りやすく面白い，オペレッタの案内状」『美術教育』284号，日本美術教育学会，pp.13-22
- 永渕 美香子(2016)「保育者養成校における人間関係力の育成」『保育文化研究』第2号，日本保育文化学会，pp.39-50
- 福井 真裕子，山成 昭世，渡邊 慶一(2009)「参加型音楽劇の実践－異世代交流と学生のエンパワーを意識した取り組み」『聖母女学院短期大学研究紀要』第38巻，聖母女学院短期大学，pp.49-71
- 増原喜代・岡村季光(2006)「奈良保育学院における領域『表現』の取り組みについて－その独自性と学生の育ち－」『奈良保育学院研究紀要』12号，奈良保育学院，pp.11-26
- 三木 弘和(2006)「デザイン身体表現論－デザイン教育と身体表現－」『文化経済学』5巻2号，文化経済学会，pp.73-80
- 三好 優美子，渡邊 洋，長谷川 千里，柳田 憲一(2018)「総合表現(創作オペレッタ)における表現科目の連携：『音楽』『造形表現』『身体表現』の観点から」『東京女子体育大学東京女子体育短期大学紀要』第53号，東京女子体育大学東京女子体育短期大学，pp.47-62
- 基村 昌代(2018)「幼児の音楽活動における指導の一考察：音楽劇制作の歌唱表現に焦点をあてて」『桜花学園大学保育学部研究紀要』17号，桜花学園大学保育学部，pp.111-124
- 山本 学(2009)「教育現場と教員養成校における音楽劇・オペレッタの教育的意義についての考察」『東京女子体育大学東京女子体育短期大学紀要』第44号，東京女子体育大学・東京女子体育短期大学，pp.97-105



## Research Trends on the Educational Effect of Performing Musicals, Operettas, and Musical Theater in Teacher and Childcare Training Courses

TAKAHASHI Maiko

This study compiled prior research on the practice of musicals, operettas, and musical theater performed in teacher and childcare training courses and surveyed the trends present in the research. In training courses, these kinds of activities are perceived as a synthesis of expressive learning and as a comprehensive expressive activity involving all five aspects of childcare. Although the scale and method varied from one course to another, musical and theatrical elements were always included, albeit with simplified dance and artistic elements. Moreover, recitals were always given. The growth that students achieved through these activities improved their skills in interpersonal coordination and self-expression, as well as their self-esteem. However, some issues presented themselves. These included cases in which coordination with other subjects in the curriculum was not possible because of a tendency to focus on instructions by music teachers, as well as cases in which it was not possible to provide suitable instruction on management. A questionnaire was given to students working in musical productions, which revealed that the students also hoped for growth in their interpersonal coordination ability. In addition, students tended to want to use their own individual skills to participate in activities, rather than utilizing what they had learned in class. Future research on the practice of performing musicals, operettas, and musical theater in training courses should consider how elements other than musical expression, such as bodily and artistic expression, as well as management-related skills, such as scheduling, can be taught. Further avenues for research include identifying and evaluating the abilities of students who participate in the activities to explore individual skills other than musical expression.

**Keywords** : comprehensive expression, musical expression, theater, subjects coordination